テーマ
住む・買う・楽しむ・学ぶ・創る

まちの風通信

H16.6.15 発行

「地域の宝物」

NPO関善賑わい屋敷
副理事長　吉村アイ

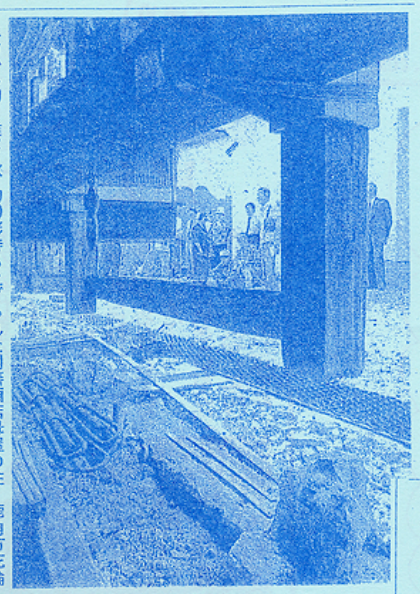
４月から始まった関善の曳き屋工事は順調に進み、５月の末にはあの大きな建物が持ち上がり、１時間もかからずに後方に約４ｍ動いたのです。工事は当初の予定より早く進み、私たちはその現場に立ち合えなかったのが、大変残念なことでしたが、その技術の高さに市民共々大変感服しました。

６月に入り、関善の建物は約１ｍ持ち上げられ、基礎工事をしています。５月２８日に行った見学会には約６０名の市民が集まり、その中には工事関係者もいて、今までにない関心の高さを表しています。

現在、関善は８月の曳き屋工事完成に向けて、着々と工事が進められております。その状況を見ながら夢の実現に向けて、ゆっくり、そしてじっくりと活動を進めていきたいと思っております。地域の宝物である関善を市民の方々と一緒に磨いて全国に発信しましょう。

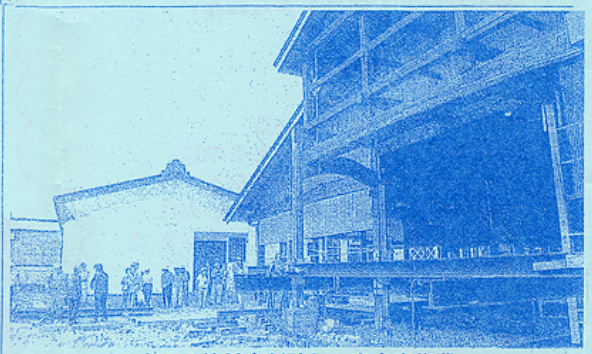
NPO法人　関善賑わい屋敷

秋田県鹿角市花輪字上花輪85番地
TEL　0186-23-2021



土台から切り離され、約20㎝持ち上げられた関善酒店母屋の柱＝鹿角市花輪

商家がふわり 市民の日引く



市民ら約60人が訪れ、曳き家作業を見守った関善酒店母屋の見学会

H16.5.29 さき新聞

秋田魁新報社

「関善」に支援金贈呈

秋田魁新報社（佐藤暢男社長）は二十八日、鹿角市花輪の旧商家「関善酒店」母屋の保存と活用に取り組んでいるＮＰＯ法人「関善賑わい屋敷」（奈良東一郎理事長）に、支援金として百万円を贈った。

同ＮＰＯは同酒店をまちづくりの拠点として再び活用することを目指し運動。母屋の取得費、改修費各一千万円の募金活動を展開している。

同酒店を訪れた佐藤社長は「地域の文化遺産を守るだけでなく、活用するために自ら行動する情熱に感服する。当社の志にも重なるものであり、応援させてもらいたい」と述べ、奈良理事長に支援金を手渡した。

奈良理事長は「私たちの運動に意義を見いだしてもらい、ありがたい。後押ししてくれる気持ちに背かないよう頑張りたい」と話した。

佐藤社長（右）から支援金を贈られる関善賑わい屋敷の奈良理事長（中央）＝鹿角市花輪

鹿角アートマップNo4

*マップ希望の方は 23-4164（豊企画）

吉村副理事長の手書きにこだわった力作です。

◎ ホームページ開設中！　http://sekizn.s50.xrea.com/

の会場に接して建つ。付近に社寺や名跡、清冽な湧水を湛えるオセドもある。確かにここは、新世紀に相応しい地域資産重視のまちづくりの拠点になるに違いない。

明治２８年編纂の小学校地誌教科書を見ると、花輪は街道沿いにコミセが連なる美しい賑わいの街と記されている。伝統破壊の時代を越えて、志ある鹿角花輪の市民は街並み再建に向けて歩み始めた。そら変容を期待を込めて見守りたい。

（滋賀県近江八幡市在住）

【賑わい応援談②】

「まちづくりの拠点に」

「木の住まい考房」主宰
鈴木　有
（前秋田県立大学木材高度加工研究所教授）

今日、関家の主屋とコモセの曳き屋、４ｍの移行が終わったという。感慨一入である。

わが国の多雪地域は国土の半分を占める。雪国多しと言えども、大屋根葺き下しの側面に付く平入りコモセは、もう鹿角にしか見られない。花輪で最後の遺構、小田嶋家と関家のコモセは絶妙な取り合わせで対面している。小田嶋家は江戸期伝統の造りを今に残し、関家は恐らく日本で最晩期に造られた現代型なのだ。関家の大屋根を支える豪壮な木組みは滅多に見られる架構ではない。保全の相談で来てもらった日本民家再生リサイクル協会の会長も、これほどのものは見たことがないと感嘆された。

私が初めて両家の建物に出逢ったのは１９９８年。道路拡幅工事が間近に迫り、特に関家は解体の危機に曝されていた。研究者仲間や地元の技術者の応援を仰ぎ、手弁当で学術調査をして報告書をまとめ、関係機関に保存を訴えたが、反応は冷たかった。以来何度も風前の灯火状況に直面した。七千余名を集めた署名の成果も実らなかった。しかし、紆余曲折を経て、活用の会が立ち上がり、ＮＰＯに結実した。建物を保有し、活用事業を自ら立ち上げ、往時の街の賑わいを取り戻そうとの取り組みが今進行中である。

普通の市民が主役を担ったその活動に、私は勇気づけられる。鹿角花輪に新たなまちづくりを志向する市民の核が生まれたからだ。両家の建物はかけがえのない地域資産。伝統の花輪市日